

東京大学大学院人文社会系研究科  
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣  
帰国報告

**最終報告提出日**

2012年12月21日

**派遣学生基本情報**

氏名 藤原啓

所属 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻美術史学専門分野修士課程二年

派遣形態 個人派遣

**研究課題名**

「ギュスターヴ・モローの新古典主義美術に関する学習の影響」

**派遣先での活動**

(1) 派遣先の基本情報

国名 フランス

都市名 パリ

研究機関名 INHA、フランス国立図書館、ルーヴル美術館及び資料室、オルセー美術館及び資料室、ギュスターヴ・モロー美術館及び資料室、国立美術館アーカイヴ

(2) 派遣期間

出発日 2012年7月23日

帰国日 2012年9月15日

総日数 55日

**主な研究成果**

(1) 当初の計画の概要

被派遣者の修士論文『新古典主義の継承者としてのギュスターヴ・モロー』執筆のため、フランスの美術館（ルーヴル美術館、ギュスターヴ・モロー美術館、オルセー美術館）及び図書館や資料館（フランス国立図書館、国立美術史研究所、国立美術館アーカイヴ）に赴き、ギュスターヴ・モローが父親や美術学校教師、美術館での模写などを通じて行った新古典主義からの学習に関する史料やそうした学習の成果を示す作品の調査を行う。

(2) 実際に達成された成果

史料を調査する中で、ギュスターヴ・モローがフランス派芸術の伝統的な大様式の歴史

画を復活させるにあたって画家の父ルイ・モローが大きな役割を果たしたことが分かった。そこで、モローが大様式の歴史画家としてフランス派の伝統の継承者となる過程を明らかにするという本研究の軸は維持しつつ、研究のテーマを父親が息子の芸術制作に対して果たした役割とした。変更後の論文題目は『ギュスターヴ・モローの作品制作における父ルイ・モローの果たした役割とその影響について』である。これに伴い、調査対象に若干の変更を行った。

画家の父ルイ・モローの考えや趣味を明らかにするために、当初予定していた父ルイの著書「*Considérations sur les beaux-arts*」の調査に加え、もともと画家と彼の両親が住んでいた邸宅であったギュスターヴ・モロー美術館が所蔵する史料の調査を重点的に行った。具体的には、ルイが自身の死の4年前にその財産をまとめた「1858年の家財目録」やモロー美術館の所蔵する家財道具や工芸品、蔵書目録の調査を行った。また、ルイ=モローの建築家としての作品に関する文献の調査も行った。これらの調査によって、ルイ=モローの思想や趣味が明らかとなった。

それに加え、父ルイの影響が強かった1850～1860年代のギュスターヴ・モローの作品調査やそれらの作品に関する美術批評記事の調査を行った。これらの調査をもとに、ギュスターヴ・モローの作品に見られる父ルイ・モローの果たした役割が明らかになったことが、この度の派遣における研究成果である。

### (3) 今後の研究展望

今回の調査を踏まえ、今後は19世紀以前の絵画論、芸術論がギュスターヴ・モローに与えた影響に関する研究を行っていきたい。特に、詩と絵画の密接な関係を論じる人文主義的な伝統に基づく数々の絵画論や、造形芸術（空間芸術）の持つ特質に関するレッシングの議論は、父の教育を通じてモローに大きな影響を与えたものと思われる。これを明らかにすることで、彼の作品が持つ特質をより明確に理解することができると考えている。